

トロツキーと日露戦争

藤井 一行

ロシアの社会主義者の日露戦争論というテーマに最初にとりくんだ日本のロシア史研究者は、管見によれば、和田春樹氏である。いまから三〇年以上もまえのことである。その後氏が開拓したテーマを受け継いだり、発展させたりする研究はあらわれていないようである。筆者はこの数年「トロツキーと日本」というテーマでいろいろな問題領域で研究にとりくんできたが、その過程で私もトロツキーと日露戦争とのかかわりという問題に遭遇するにいたった。かれの日露戦争観がどんなもので、たとえばプレハーノフやレーニンのそれとの異同がどんなものをかを調べてみた。和田氏の先行研究に多くを学びつつも、同時に批判的な吟味を加えることにもなった¹⁾。小論は、その報告である。

一 「われわれの『戦争』キャンペーン」

トロツキーが日露戦争について論及した最初の論文は、一九〇四年三月に、ロシア社会民主労働党の機関紙「イースクラ」にTというイニシアルで発表された「われわれの『戦争』キャンペーン」という論文²⁾である。プレハーノフが、「イースクラ」編集部に自分をとるかトロツキーをとるかという「最後通牒」を

つきつけるきっかけとなったいわくつきの文書である。論文はかなり晦渋で、なんども読み直さないと論旨がとらえにくい。ドイツチャーも、内容も文体も混乱していて、その点でのプレハーノフの抗議に根拠がなくなっているほどである³⁾ (2) 102-103)。

しかしドイツチャーの批評はあたっていない。トロツキー論文はたしかに非直截的な表現、反語、アイロニーに満ちていて筆者の意図するところをとらえるのは容易ではない。それは、若いトロツキーが文章表現に凝っていたせいである。トロツキー自身、後年当時の自分の文体に「凝りすぎ」があつて、レーニンがそれを指摘したのは正しかったと述懐している⁴⁾ (3) 181; (4) 311 参照)。

しかし編集部ではトロツキー論文が理解できていた。マールトフは、それが各地の党委員会に見られた、資本の利害の衝突が戦争をもたらしたとする図式主義的な対応を批判したものとして共感的にとらえていた⁵⁾ (5) 94)。

ピエール・ブルーエもこの論文の意味についてつぎのようにのべている。

「トロツキーは、勃発したばかりの露日戦争にたいする党の姿

勢についてきわめて批判的な仕方で吟味した」〔6〕84〔7〕
〔33参照〕。

ブルーエの指摘したとおりで、すぐあとに書かれる「われわれの政治的課題」の主張の一部を先取りした文書だと言える。

論文は「ロシアは試練にさらされている……歴史の掌中にある試練の用具は戦争である」という文言ではじまる。論文の狙いは、主に社会民主主義者の組織（地方委員会）が発行する反戦文書の適否を検証することにあった。トロツキーは次のように主張した。

「……『戦争』ピラの、つまりはアジェーション全体の主な欠陥は、ロシアのプロレタリアートの国際的な課題をその民族的情况の諸条件に結びつける能力の欠如、あるいは、……一般民主主義的運動の途上にプロレタリアートの自立的政策の軌道を見いだす能力の欠如である。」

「かれらは、戦争の『反国民的な』（反プロレタリア的であるだけでなく）性格をまったく無視し、満州と朝鮮に、日本とロシアのブルジョアジーがひとしく利害関係をもつ市場を見いだし、紙の上でロシアと日本の国家権力と社会階級の相関関係を同等にあつかい、それこそが階級的政策をつくりだすことを意味すると考えている。だが、それは階級的政策の放棄を意味するにすぎない。」

トロツキーは日露の国民にとって戦争の意味が違ふと考える。

「日本とのロシアの戦争は、日本のロシアとの戦争とまったく違う……。われわれの『戦争』キャンペーン全体の性格を規定するはずの、両交戦国の立場の根本的相違は、いくどとなく『イースクラ』によって明らかにされてきた。日本の側からすれば、そ

れはブルジョアの国民の、ブルジョア的発展の、すなわち資本主義的搾取のいつそうの拡大の諸条件をめざす戦争である。ロシアの側からすれば、それは、国民のブルジョア的発展の諸条件との解決しがたい矛盾に陥った専制政府の戦争である。そこから交戦国の社会の政治思潮の違いが出てくる。日本の広い社会層の、真摯な張りつめた国民の愛国主義の高揚——そして、われわれの社会の自由主義者や民主主義者の層の完全な「反愛国主義」。

和田氏もこのトロツキー論文に言及している。だが氏の所論には不可解な点が少なくない。たとえば、氏はつぎのように言う。

「ここには、どのようにそれへ『戦争』キャンペーンのこと——藤井を展開したらいのか、という積極的な提言はなく、プレハーノフから『お喋り』だと批判されたのも無理はない（このためトロツキーは『イースクラ』を去ることとなった……）」が、トロツキーは課題の困難さに気がつきかけてはいたように思える」〔9〕22〔8〕264もほぼ同じ。

まず、「プレハーノフから『お喋り』と批判された……」と和田氏は言うが、その典拠として氏が示すドイッチャー本の当該ページにそれに該当する文言は見あたらない。また「……積極的な提言はなくプレハーノフに批判されたのも無理はない」と言うが、「積極的な提言」がトロツキー論文にないとは判断するかどうかは解釈の相違なので問わないとしても、そのゆえにプレハーノフに批判されたのは無理がないとする氏の判断については根拠が示されるべきであろう。そのせいで『イースクラ』を去ることとなつたとする根拠も。

和田氏のトロツキー論及はそれだけで終わっている。トロツキーにはその「愚論」以外にまともな日露戦争論が存在しなかった

かのように。

二 『われわれの政治的課題』

——反戦闘争をどう組織するか

先のトロツキー論文の論旨は、数カ月後に刊行される『われわれの政治的課題』（ジュネーヴでロシア社会民主労働党の名で発行、その序文には一九〇四年八月二三日という日付がある）と関連づけて読めばいっそう明快になる。これはいち早く党の代行主義を批判した論文として著名なものであるが、党の組織活動・宣伝煽動活動のありかたについて論じる中で、党が日露戦争にいかに対処すべきかという問題についても詳論している。

「戦争のこの半年間はプロレタリアートの政治的教育にとつていかに無益であつたことか！一方、戦争はわが党に全ロシア的な政治運動のための貴重な材料をあたえている。なぜならそれはもつとも底辺の下層の意識にきわめて鋭くつきささりつつあるからだ……」。一例。党は、一、二、三カ月をかけて「戦争のためには一文もだすな！」というスローガンに革命勢力を結集するという任務を提起する。……あらゆるサークルやグループの中で、密室での「討論会」や大がかりな集会で、ピラで同一のテーマで演説がおこなわれる。……基盤が十分に準備されたところで地方の各委員会——政治的に思考し、政治的にめざめている中央の指導のもとで——自治機関と新聞の恥すべきふるまいにたいする全ロシア的な抗議を組織する——怒りの決議の形態で、また可能なところでではしるべき大衆デモの形態で」（10）42；（11）93-94。

「われわれが、われわれのもつ個人と組織の総力をあげて、た

だちに開始しなければならないキャンペーンの出発点となるべきものはむしろ戦争である。戦争からわれわれが得るスローガンは明白で、平和と自由である。われわれは、そのスローガンを、戦争にたいするわれわれの原理的な態度の定式化としてのみならず、われわれがただちにかちとりたいと思う目的としてもかけなければならぬ。われわれはたんに平和のためのデモをするのではなく、実際に、専制の「停止」とあわせて、戦争の停止を願っている。われわれは、それを望まなければならない。そして、そのことが、われわれのアジテーションの内容にも論調にもあらわれなければならない」（10）85（2）。

党は大衆に、抽象的なスローガンではなく、具体的なスローガンを、つまり「闘争スローガン」、「行動スローガン」をあたえるべきだとトロツキーは提言する。

それはどういうことか？ 反戦、ブルジョア打倒、専制打倒、社会主義万歳などの一般スローガンだけではだめであり、ツァーリズムの運命が戦争と結びついていて、専制の転覆が近づいている現状では、その課題に即した「戦術的」結論を引き出さなければならぬ。それは、「即時停戦」である。

そこからトロツキーは三つの「闘争・行動スローガン」をかかける。

第一は、「なんとしても平和を！」というスローガンである。「戦争のあらゆる帰結を調べあげ、それを大衆の財産にすること」、的を射た簡潔・明瞭なピラを全国のすべての人間にとどくようにすること。とくに失業者の間での、「人民に貧困、失業、死しかもたらさない戦争の終結」というスローガン。

ある段階では、「支配階級の社会諸組織の戦争にたいする態度

をも対象にするアジテーション活動も必要になる。労働者は、ゼームストヴォ、国会、大学、学会、新聞などが戦争反対の声をあげるよう要求しなければならぬ。革命的プロレタリアートの要求にそれらの組織がいかに反応するかでその先のキャンペーンの進行が規定される。

第二は、戦争犠牲者に国家支援をというスローガン。その面でのアジテーション活動で、プロレタリアート、とりわけ失業者が、国民の金を戦費に浪費している国会やゼームストヴォに反対するデモに立ち上がりうる。

第三は、憲法制定会議のスローガン。反戦運動が深まり広げれば、専制はそれだけ窮境に陥ることになる。憲法制定会議万歳というスローガンが、「窮境からの決定的な活路への指針」として、全ロシアに轟かなければならない。「憲法制定会議がロマーノフ家の全資産と同じく戦争を廃棄しなければならない」(「10」87、88)。

憲法制定会議の招集による停戦という戦略はレーニンと同じである。レーニンは「ロシアのプロレタリアートへ」という文書(開戦直後の一九〇四年二月三日(一六日)で早くも、犯罪的戦争の元凶がツァーリズムであることを指摘して、こののべていた。

「自覚的な社会民主主義的プロレタリアートは、『専制打倒』『人民の憲法制定会議の招集』という要求をかかげて何十倍ものエネルギーを注いで行動しなければならない」(「12」173;「13」106 参照)。

以上に概観したような、一九〇四年のトロツキーの亡命地での所論をブレハーノフやレーニンのそれと比べて見ると、いくつか

特徴が見られる。ブレハーノフやレーニンにあつては日露交戦国の文明の発展水準にかんする客観的な分析とそこからの戦争の帰趨ならびに革命にたいする影響にかんする予測が前面に出ているが、トロツキーにあつては関心はより実践的で、いかにして戦争をやめさせるか、そのためにいかに反戦運動を組織するかという問題に向けられている。ペテルブルグ・ソヴェートの中心的指導者としての助走が亡命地ですではじまろうとしているように見える。

三 反戦のアジテーション

「血の日曜日」事件が起こると、ブレハーノフやレーニンが亡命地にとどまり続けるのにたいし、トロツキーは急遽帰国して活動を開始する。はじめキーエフに居をかまえたトロツキーは、ボリシェヴィキの仲間(中央委員会の印刷部門を担当していたクライン)と協力しあつて、地下で反戦ビラの作成にとりくむ(その経緯は「わが生涯」に詳しい)。

トロツキーが書いた最初の文書は、「農民よ、われわれのことをばを聞いてほしい!」という農民向けのビラ(一九〇五年三月の発行と推定されている)で、ロシア社会民主労働党中央委員会の名で出された。文書はキーエフ県の憲兵本部アルヒーフで発見された。

奴隷の境遇にある農民に労働者と合流して、みずからの解放のために立ち上がるよう呼びかけたものであるが、その中で、だれがなんのために戦争をはじめたかをわかりやすく説いている。

農民に戦争という重荷をおしつけたのは、専制政府であり、

「農民の任務は金を納めて死ぬことである」。「……戦争はこの一年で約二〇万人の人命を呑みこんだ。二〇万の若い命が無意味に減じた……二〇万！ 口にするも恐ろしい。それは、農民たち、あなたたちの血をわけた子どもたちなのだ！」（「14」212；「15」108参照。）

【課題】で提起した社会民主主義者のアジテーション活動の実践の第一歩である。

ついで、「ロシア社会民主労働党ペテルブルグ・グループ」の名でまかれたビラ。「労働者たち、戦争の中止を要求せよ！」という題名がついている。対馬沖でのロシア艦隊の全滅の直後の文書である。呼びかけの趣旨は戦争の即時中止・講和である。

「講和、遅くならないうちに、国が減びないうちに、即時の講和！……労働者の仲間たち！ われわれは祖国の擁護のため、全ロシア国民の擁護のため、ハルビン近郊で逃げたい破滅が待っている不幸な満州軍を擁護するためにいまや断固として立ち上がらなければならない。ペテルブルグの労働者たち、仲間たち、われわれは国民の刑事にたいして、犠牲と流血はもうたくさんだ！ 犯罪的殺戮はやめろ！ といっせいに叫ばなければならない。」

具体的には、それは反戦ビラを工場で、店で、市場で、教会で、街頭で、広場でたゆみなくばったり、貼ったりすること、口頭でアジテーションをおこない、集会を開き、即時戦争中止という人々の一致した決意（決議）を表明させることである。戦争中止の要求はその元凶の打倒に結びつけられる。「われわれは国民的憲法制定会議を要求する！……われわれが戦争による殺戮に抗していっせいに、公然と、勇敢に立ち上がり、全国がわれわれを支援してくれるなら、——そのときツァーリ政府は全国の怒りの

流れの中でおぼれてしまう。仲間たち、活動にかかれ！ 戦争をやめろ！ 卑劣なツァーリ政府打倒！ 人民の代表機関万歳！」（「14」254-256；「15」142-143参照。）

【課題】でトロツキーが提言した「闘争・行動スローガン」の労働者への提起である。

同じ「ロシア社会民主労働党ペテルブルグ・グループ」の名で出された、予備役の兵士に向けて動員拒否を呼びかけた「予備役の兵士たちよ、わが身を守れ！」というビラもある。

そこでは、予備役の兵士たちを待ち受けているものが死であるということ、日本の方が強いので、敗戦が必至であるということ、牛でさえ屠畜場に連れて行かれるときには必死に抵抗するというのに、諸君はおとなく沈黙するののか？ 森で盗賊に襲われたら、抵抗するはずだ。「予備役の兵士たち、諸君には失うものはない。懲罰をおそれるな！ 死より悪い懲罰を思いつくことなどできないのだ。諸君が駆りたてられていくところで諸君を待っているのは、どつちみち死である。」ビラは、「流血の殺戮反対！」「盗賊による動員反対！」という「闘争・行動スローガン」で結ばれている（「14」251；「15」156参照）。

トロツキーは、思考や行動の面でプレハーノフやレーニンよりも、ずっと実践的な状況に身をおいていたと言えるように思う。かつて原暉之氏が評したとおりである（「15」483）。

四 日露戦争の意味づけ

ロシアの社会民主主義者たちは、日露戦争の意味をどのように見ていたか？

周知のように、レーニンは日露戦争を、歴史的発展段階を異にする、言いかえれば文明度に高低がある先進国と後進国の戦争としてとらえるという視角が強かった。そして前者の方が勝利するだろうと予測していた。

ブレハーノフの場合は、ツァーリの国とミカドの国のいずれも反人民的な国家であることを認めつつも、国際的見地に立てば、ミカドの国の勝利の方を、「より小さな悪」として願わざるをえないとする（論文「厳しさが不可欠」一九〇四年五月（「16」89, 100））。

トロツキーの場合はどうか？

日露戦争中の諸著作に、戦争の客観的意味とか役割について論じたものがほとんど見られないことはすでにのべたとおりである。ポーツマス講和後もトロツキーは専制との革命的対決という現実の闘争に追われる。日露戦争や講和の意味について思弁的に論じる暇はなかったと思われる。

しかし数年後の一九一〇年七月、その問題に論及する機会を得た（ブルガリア社会民主労働党第一七回大会での「ロシア革命」という演説）。

「露日戦争は人民大衆に巨大な影響をおよぼした。戦争は、『巨大な無敵の戦力』としてのツァーリズムの魅力をぶちこわした。全世界のあらゆる進歩的なものを窒息させつつあり、ヨーロッパのあらゆる証券市場に立脚している巨人が粘土の足で立っているということ、小さな日本がそれに重大な打撃を加えたということが明らかにになった。ロシア国民には、その巨人が弱体であるということ、それはよそからの打撃で倒れかねないということが明らかにになった」（「17」209）。

そこにはレーニンやブレハーノフと同じ発想が見られる。とくに社会主義インタールのアムステルダム大会（一九〇四年八月）でのブレハーノフの演説（「16」33）を彷彿させる。

トロツキーのもうひとつの発言。一九一四年に書かれた「戦争とインターナショナル」（『戦争と革命』所収）に見られるもの。

トロツキーは「ツァーリズムとの闘い」という章で、戦争と革命との関係一般について論じ、ロシアとドイツの戦争の帰趨はロシアの革命にどんな意味をもつか、とりわけツァーリズムの敗北は革命を利することになりえないのかを問題にする。

「ドイツとロシアの戦争から、ロシアにたいするドイツの勝利から——ホーエンツォレルンの意図にかかわらず——ツァーリズムの弱体化が、そしてことによるとその完全な瓦解さえ起こるはずである。『ロシア革命の偉大な無自覚的な用具であるヒンデンブルグ万歳！』——われわれはそう歓声をあげる……」（傍点筆者）。

日露戦争についてもこう論じる。

「ミカドとかれのサムライたちは、ロシアの政治的解放にはいささかも関心をもっていなかった。それにもかかわらず、露日戦争は革命の事件に強力な刺激をあたえた」（「18」103）。

トロツキーは、ロシア革命にとつてのドイツや日本などの戦勝がもつ「非意図的」な役割について語っている。しかし、それはあくまで客観的な意味・役割についてであって、そのゆえに日本やドイツの勝利を歓迎するというような視点ではない。

このような、日本側からするいわゆる「非意図的」な貢献については、講和直後にボリシェヴィキのヴォロフスキも、機関紙「プロレタリー」に書いた「講和と反動派」という論文で言

及していた(19)。

その所説は和田氏によって、「日本政府、日本軍をロシア革命の「同盟者」だと明言するにいたった」ものと解釈される(「8」267)。その論法によれば、トロツキーもまた日本軍国主義の盟友ということになるのであろう。

しかしトロツキーは日本の戦勝がもつ別の二つの意味も見逃さない。

「露日戦争が革命をつくりだしたと考える者は、出来事と出来事の関連がわからず、理解していない。戦争は革命を早めただけのことである。しかし、まさにそのことで戦争は革命を内的に弱めもした。もし革命が内部の勢力の内発的な成長から発展したとすれば、革命の到来はもっと遅かっただろうが、ずっと強力で、計画的であつただろう。したがって、革命は戦争にまったく利益をもっていない。それが第一。第二には、露日戦争は一面でツァーリズムを弱体化させたが、反面で、日本の軍国主義を強化した」(「18」104)。

実はヴォロフスキーにしてもそうした側面については論及していたのである。

日露戦争での「戦勝」以来、日本は軍事力をさらに強化し、日露戦争で獲得した「満州」の特殊権益の拡大を着々と進めていく。そしてほぼ二五年後、公然と中国侵略にのりだす。

その事態に面して、トロツキーは一九三四年、「日本は破局に向かっている」という論文を発表し、あらためて日露戦争についても論及した(「20」413)。

日露戦争での日本の勝利は「それ自体としていかに輝かしいものであつたにせよ、後進性の、より大きな後進性にたいする優

位の所産であつた。相対性の原理は軍事でも全能である。」日本はこれまで一度も先進国民と力比べをする機会がなかった。「軍隊の力量の比較係数は……、国の自然資源の状態、経済発展の水準、諸階級の相互関係、軍隊そのものの内的資質……などの生きた社会的・歴史的要因を結合したものである。」

日本の軍国主義は軍事的高揚の時期の幻想で生きようとし、経済の破綻を軽視し、国家予算の半分を呑みこんでいる。日本の軍国主義と国民経済との相互関係、日本の工業と、敵国になる可能性のある国の工業との相互関係を見れば、将来の戦争での優劣は明らかで、日本はきわめて不利である。トロツキーは日本の支配層が根拠のない「日本不敗神話」の催眠状態に陥っていることも指摘する。

日本帝国主義にかんするかれの分析と予測が正しかったことは、それから一一年後に実証される。

注

(1) 先行研究にたいする批判的論及であるだけに、詳しく事実データをあげて批判の根拠を示すべきなのだが、紙幅が限られている。左記の私のサイトでそれを補うつもりである。

<http://fujii.com/nichiroseno.html>

(2) 「11」の書物は私と故左近毅との共訳で刊行されているが、原著の、「一九〇四年八月……」という日付のついた「返信」という部分は、左近が担当した。しかし、訳文ではその日付が脱落しているし、訳文も必ずしも適切でないので、本稿での引用部分は藤井自身が訳出した。

文献

- [1] Наша "военная" кампания. Искра, 15 марта 1904 года.
- [2] Айзэцк・ドイッチャー「武装せる予言者・トロツキー 1879-1921」田中・橋本・山西訳、新潮社、一九六四年。
- [3] Л. Троцкий, Моя жизнь. Опыт автобиографии. 1, Из-во "Гранит", Берлин, 1930.
- [4] Троцкий「わが生涯」上、岩波文庫。
- [5] Л・マールトフ著・加藤一郎訳「ロシア社会民主党史」新泉社、一九七六年。
- [6] Pierre Broué, Trotsky, Fayard, 1988.
- [7] 杉村他訳、柘植書房「トロツキー」1、一九九三年。
- [8] 和田春樹「日露戦争とロシア革命」【ニコライ・ラッセル―国境を越えるナロードニキ】中央公論社、昭和四八年、第四章。
- [9] 「日露戦争とロシアの社会主義者」【ロシア史研究】第一八号、一九七二年。
- [10] Н. Троцкий, Наши политические задачи. Женева, 1904.
- [11] Троцкий「われわれの政治的課題」藤井一行／左近毅訳、大村書店、一九九〇年。
- [12] В.И. Ленин, Полное собрание сочинений. Издание 5-е, Т. 8.
- [13] 【レーニン全集】大月書店版、第四一卷。
- [14] Л. Троцкий, Сочинения. Том 2, часть 1, Москва-Ленинград, 1925.
- [15] 【わが第一革命】原暉之訳、現代思潮社、一九七〇年。
- [16] Г.В. Плеханов, Сочинения. Том 13, 1926, М.-Л.
- [17] Л. Троцкий, Сочинения. Том 2, часть 2, Москва-Ленинград,

1927.

- [18] Л. Троцкий, Война и революция. Том 1, издание 3-е, 1924, М.
- [19] В. Воровский, Мир и реакция. Пролетарий, No. 17, 14 (1) сентября 1905 года.
- [20] Япония движется к катастрофе. Бюллетень оппозиции (большевиков-ленинцев). N38-39, 1934, Paris.